The Monologue of Fire

※ 以下の内容は、全て英語で書かれた手紙を、本人の了承を得た上で翻訳したものである。また、公開も許可されていることをここに明記する。

――親愛なるアンドリュー・ペスティ先生

お久しぶりです、アンドリュー先生。四年もメール一つ寄越さなかったくせして、突然このように長いお手紙を出してしまう無礼を、どうかお許しください。

私たちエヴィリア兄妹は、そちらの孤児院で七年間も、先生方に面倒をみていただきました。その恩は、メモリートとして得たお金を寄付し続けたとしても、決して返せるものではないわ。特にアンドリュー先生、あなたは院長という忙しい立場にありながら、私たちをいつも気にかけて下さいましたね。

眼鏡ごしにのぞくコバルトブルーの瞳には、幼い子供のようなキラキラした輝きがあったし、サンタクロースのようなフサフサのおひげの下のお口は、常に笑っていらっしゃった。私たち、先生とはたくさんお話ししました。先生はじっくり話を聞いてくれたし、決して私たちを否定しなかったから。

でも、私たちには、まだアンドリュー先生にお話していないことがあります。今から私、シェーラ・エヴィリアは、その懺悔をしようというのです。

これは私の独断です。そうね、だからといってサミュエル兄さんは、止めもしなければ怒りもしないでしょう。先生もよくご存知のように、兄さんはそういう人ですから。

まず初めに、私たちが生まれ育った場所のことについて書きましょう。私たちはニューヨークにほど近い、けれどとても近いとは思えないような、とてつもない田舎に生まれました。人より牛の数の方が多いくらいです。

家と家の間隔は三マイル（約五㎞）ほどで、なだらかな丘陵地の合間に、ぽつぽつとログハウスが建っているところ。森に抱かれた平和な場所。

父は近くの――と言っても、車を三十分走らせないと着かない距離だけど――大きな農園で、経営の手伝いをしていました。普段は穏やか、でも反論されるのが大嫌いな人で、そうなるとすぐ暴力に走ったわ。

母はとても頭がよく、同時に世間体を大切にする人でした。奇怪な外見で生まれてきた私たちを激しく憎悪し、幾度となく

罵りました。

後で知ったのだけど、両親は駆け落ちした人たちで、親類からとっくに縁を切られていたそうです。お金もないし、味方もいない。そんな中生まれたのが双子。一人だけでも養うのが大変だったのに、二人なんて以ての外。しかも浅葱色の髪と黄金色の目だなんて！

――呪われた悪魔の子。

これが、母の口癖でした。父も口にはしなかったけど、私たちの存在をとことん無視しました。ご飯が出てきたことなんてないわ。両親の食事や、冷蔵庫、あちらこちらから盗みました。それでも足りなくて、いつも飢えていました。

今思えば赤ん坊の頃は、それなりに可愛がられていたのでしょうか。こうして生きているんだもの。少なくとも、両親に私たちを殺すことはできなかったのです。だって、悪魔の子だものね。殺したりしたら、何があるかわからないものね。

つまり私たちは、両親から虐待を受けていました。痣と切り傷だらけの痩せ細った身体を見れば、それは一目瞭然だったことでしょう。でもキンダーガーデン（保育所）へ行かせてはもらえず、周りには私たちの存在すら知らない人がほとんどでしたから、気付いてくれる人は皆無だったのです。

毎晩、暗くて寒い屋根裏部屋の中の、汚く粗末なベッドで、兄と抱き合って寝ました。お互いの存在が唯一の救いでした。臆病な私と違い、サミュエル兄さんは強い人です。どんなに酷いことを言われても、どんなに叩かれて蹴られても、両親を睨み続けていました。背後で怯える私には手を出させまい、と、小さく細い体で私をかばってくれました。

そんな日々が終わりを告げたのは、忘れもしないある秋の日。風の強い日でした。夜中に突然大火事が発生し、両親は家もろとも、骨も残さず焼き尽くされたのです。

奇跡的に家から脱出できた私たちは、その後孤児院に引き取られ、多くの仲間と共に育ちました。十四歳でメモリートとして日本へ集められるまで。

そうだわ、先生。

先生にはメモリートのことを、何一つお話しできていませんでしたね。私たちがどんな能力を持っていたのかも。

日本からメモリート召集の便りが来た時、先生は大層心配して、私たちを引き留めました。けれど、これ以上孤児院に迷惑をかけるわけにもいかないし、自分たちが特殊な存在であることはわかっていたから……。それに、サミュエル兄さんが行く場所ならば、私はどこまでもついて行きたかったの。

結論から言うとね、先生。私はメモリートになってよかった。
そもそもメモリートというのは、各地で起きている不思議な事件を、生まれもった特異な能力を持って解決していく人たちのことです。事件の元凶を探り、その地を浄化するために、その元凶を倒すの。戦闘部隊だから、もちろん死ぬこともあるわ。
約百年前に起こった世界戦争の影響で、この世界は汚れてしまったのです。人の悪意や悲しみ――人だけには限らないけれど――が、害をなすものとして、恐ろしい姿で表れるようになってしまった。
同時に、常人では得られない、特殊な能力を持った人々も現れました。その中の一人、予言の力を持った人が、とある山奥で巨大な岩を発見しました。これは『記録ノ大岩』と呼ばれ、小さく砕かれて、それぞれのメモリートに配布されるようになったの。この石を持っていれば、各地の『記録（メモリー）』が見られるのよ。
極端な例えをするなら、石は持ち運び式ＤＶＤプレイヤーみたいなものです。いろんな場所に固定のＤＶＤ（もう古いものだけれどね）が置いてあって、それを再生すれば、過去にその場所で何が起こったかわかる。そんな感じの物が『記録』。
そうして見た『記録』を手掛かりに、事件の元凶を探っていくのです。
私たちの能力のことを記す前に、過去の話を続けましょう。そうすればおのずと、私たち兄妹の能力が見えてくるでしょうから。
当時、孤児院の先生方は、何も聞いてはきませんでした。孤児の仲間たちにもそれぞれ事情があるのでしょう、誰一人として私たちに大火事のことを尋ねませんでした。
けれど口にしないだけで、皆、謎だらけの大火事のことを不審に思っていたに違いないわ。あのときは何も話すつもりがなかったけれど、あれから十年以上が経った今、全てをお話ししようと思います。
話が逸れてしまいましたね。ここからが本題です。
ある日、私たちはたき火を起こすことにしました。父の仕事上の上司が来るからといって、暴風の中、家から放り出されたのでした。
風を防げるような建物もなく、仕方なく家の裏にかがみこんでいましたが、あまりの寒さに耐えかねて、火を起こそうということになったのです。兄さんが木の枝を拾ってきて、いつも持っているマッチ（物置に閉じ込められるのは珍しいことではないので）をすりました。
けれど、小さな火は風にあおられて、すぐにかき消されてし

まいます。私は歯をがちがちと鳴らし、必死に炎が風に負けないように祈り続けました。
しばらくして、苛々と兄さんが言いました。
「シェーラ、君がやってくれる？」
うなずいて、サミュエル兄さんと交代し、マッチを手に持つ私。兄さんはというと、明後日の方向を向いて、両手を前に出しています。組み合わされた歯からは、ぎりぎりという音が漏れていました。
「……だめだ、僕の能力じゃ、まだ止めることまではできない」
よくわからないことをつぶやいて、兄さんが両手をおろし、悲しそうな顔をするものですから、私も悲しくなりました。
炎さえ。
炎さえ、燃えてくれれば。
やっとのこと枝に燃え移ったものの、今にも消えそうなたき火を見つめて、私は祈りました。

炎よ。
お願い、その体に灯して。
命を灯して。
私たちの命に灯して。
私にあなたの姿を見せて！
炎が燃え上がりました。
私の思いに応えるように。

今思えば、それが開花でした。
兄さんはとっくのとうに自分の能力を自覚していたようですが（いつなのかは未だに教えてくれません）、私はこのときに目覚めたのでした。
私は呆気にとられましたが、人が変わったように狂喜する兄さんにつられて、一通り喜び合いました。寒さも忘れて。自らがしたことの歪さも忘れて。
これから起こることを。
サミュエル兄さんが考えていることを、わかろうともしないで。
その日の夜。
夜中、サミュエル兄さんが私を起こしました。
「シェーラ、昼間のことを覚えてる？」
「覚えてるわ」
「君がたき火を燃え上がらせたことも？」
「ええ、もちろんよ」
兄さんは私の手をぎゅっと握り、笑顔で続けます。
「すごかったね。何でも燃やすことができそうだった。シェーラ、君は僕の自慢の妹だよ」

「ありがとう、兄さん」
大好きな兄さんに褒められたことが嬉しくて、私も笑いました。眠かったけれど、兄さんの白い肌と金色の目を見ているうちに、少しずつ目が覚めてきていました。まるで猫みたい。彼の容姿は、暗闇でよく映えるのです。
「このまま僕ら二人で、奴らから逃げ出そうよ。僕、いいことを思いついたんだ」
奴らとは言うまでもなく、両親のことです。私は驚いて聞き返しました。
「逃げ出す？　どうやって？」
「燃やすんだ」
「……何を？」
兄さんはニコニコと答えます。
「奴らをだよ。家ごと、奴らを燃やすんだ」
兄さんが昼間、狂喜した理由がやっとわかりました。
このときの兄の笑みは、確かに悪魔のそれでした。けれど私も、同じような顔をしていたに違いありません。現に私は、サミュエル兄さんに促されるままに、マッチの束でつけた火をさらに燃え上がらせ、キッチンを火の海にしたのですから。
流石に、大きな叫びを上げる炎を見ると、私は腰が抜けてしまいました。反対に、兄さんはとても楽しそうでした。本当に、とても楽しそうでした。
今思えば、私たちが難なく家から脱出できたのは、自分たちの通り道を兄さんが作っていたからだったのです。部分的な強い風を起こして炎を弱め、道を確保し、兄さんは私の手を引いていきました。涙を流す私をなだめながら、嬉しそうに、幸せそうに。
まだ終わりません。兄さんはくるりと振り返るなり、右手を高々と掲げ、ぐるぐる回します。途端に風が巻き起こり、ますます炎が大きくなりました。家が轟音と共に燃え上がります。
兄さんは笑っていました。右腕を回すのをやめ、震えながらしがみつく私の頭を優しく撫でながら言いました。
「ありがとうシェーラ！　僕たちは、これで自由になったんだよ。君のおかげだ」
「でも、もしあの人たちも家から出てきたら……」
「大丈夫だよ。奴らは最近、薬を飲んで寝ているんだ。耳栓もしてるし、毛布でぐるぐるに体を包んでる。気付いたときにはもう遅いさ」
何でそんなことを知っているのか。私が問う前に、兄は答えました。
「僕はね、君が火とお友達であるように、風とお友達なんだ。

数週間前から奴らの寝室に、さむーい隙間風を吹き入れさせてるんだよ。窓の外では風を唸らせて、すっごくうるさくしておいたし。夜の間、僕たちが自由に動けるようにしたかったんだ」

私たちにしかできない、計画的完全犯罪。

兄は七歳にして、それを計画し、私という協力者と共にやってのけたのです。

しかも、まぎれもない実の両親を殺害するために。

私はサミュエル兄さんに言われるがままに行動しただけですから、これは全て兄さんが考えたものです。もちろん、私に罪がないと言うわけではありません。私がいなければ、こんな事にはならなかったんですもの。

けれど、もしああしていなければ……今私たちは、生きていないのだろうと思います。だからといって、決して許されることではありません。罪を自覚した当初、私たちは裁きを受けようとしました。

でも、アンドリュー先生。

私たちがしたことは、何の罪になるのでしょう。

私たちがしたことといえば、『数束の新聞紙を集めて、その上に束ですったマッチを落としたこと（すぐ消える程度の火です）』『炎（とも）を応援したこと』『右手をぐるぐる回したこと』。

刃物で両親の胸をついたわけでもなく。

首を絞めたわけでもなく。

毒薬を飲ませたわけでもなく。

崖から突き落としたのでもなく。

何一つ直接手を下すようなことはしていないのです。

だって、先生。

能力は、十歳以上になって初めて開花するものなんです。

七歳で満足に能力をコントロールできるなんて、あり得ないことなんです。

もししたとすれば、能力の大きさに耐え兼ねて、心身共に壊れてしまうはずなんです。無事でいるはずがないんです。

例えそれが、四大元素を司る、神に愛された能力者であったとしても！

……私たちは四大元素（火、風、水、土）の内の二つ、火と風を司る能力者だったのです。メモリートはそれぞれ違う能力を持っていて、全ては血縁関係で継がれるものでしたが、四大元素能力者だけは違います。ある日突然覚醒するの。

人はそれを、神に見初められたと表現するわ。

選ばれてしまったばかりに、私たちはこんなことをしても、

無事でいられてしまったのかしら。

これで、過去の話は終わりです。

現在の私たちは、せめて上星先生にだけは恩返しができるように、日々メモリートとして日本で戦っています。

上星先生というのは、日本に来てから私たちの面倒をみてくれた、先輩メモリートのことです。メモリートには最初の一年間、講習期間があり、後輩メモリートは『生徒』として教えてもらうことになっているの。

私たちは両親を憎むあまり、日本に来てから本名を名乗ろうとしなかった。あんな奴らにつけられた、己の名すら呪ったのです。それで上星先生に「名前をつけてほしい」と頼みました。

サミュエル兄さんは「ソラ」。

私は「サラ」。

彼は、そう名前をつけてくれました。今では、本名もその名前も、どちらも使っています。どちらも私たちを表す、大切な名ということに気づいたから。

上星先生は全部ご存知です。私たちがしたことを知った上で、私たちの本名も知った上で……にっこり笑って、今でもソラ、サラと呼んでくださいます。

ただし、私たちがどうするべきかは教えてはくれません。

「それは君たちの決めることだ。たくさん悩んでほしい。悩んで悩んで、その末に二人で出した答えなら、俺は君たちを止めたりしない。全て受け入れるよ」

そうおっしゃいました。

未だに答えは出ていません。

これからも私たちは、自らが起こした炎に焼かれ続けるのでしょう。そして両親から得られなかった愛に飢え続けるのです。

生きながらにして私たちは、地獄を見る。

きっと、それが報いなのでしょう。

サミュエル兄さんは、裁かれる日が来るまでは戦い続けたい、と。家族を憎むような人間を作らないためにも、愛されない子供を減らすためにも、生き続けたいと言います。

贖罪には自分ひとりで十分だ、君はいらないとも言います。

そんなことない。

私も兄さんと共に行きたい。

私のたった一人の家族を、たった一人で死なせたくない。

双子なんだもの、私たち。サミュエル兄さんは、同い年の兄であり、同い年の弟なんだもの。

私と同じで、本当は兄さんも臆病なんだもの。

長々と書いてしまいました。これで終わりにします。
先日、アンドリュー先生が、院内で亡くなられたという報せが届きました。生きている内に、全てをお話ししておけばよかった。今、後悔の気持ちに押しつぶされそうになりながら、この手紙を書いています。
どうか、あなたに届きますように。
ありがとう、アンドリュー先生。
愛しています。先生が私たちを愛してくれたのと同じくらい、心の底から愛してる。

二〇四八年四月五日